

# 多面的なグローバル化の影響を冷静に理解しよう

櫻井宏二郎

多くの経済現象がそうであるのだが、とりわけ「グローバル化」の影響については、誰の立場から見るか、全体を見るか一部を見るかによって見え方が大きく異なる。そのため時として感情的な対立も引き起こされる。

教科書的な例を挙げると、貿易の自由化は一国の比較優位産業を有利化させ、比較劣位産業を不利化させる。簡単に言えば、得をする産業と損をする産業が出るということだ。そして輸入面において、消費者の利益は薄く広く行きわたるのに対し、比較劣位産業が受ける不利益は特定の産業に集中するため、ロビー活動等によって貿易政策は政治問題化しがちである。トランプ政権の保護主義的貿易政策はまさにこの文脈で理解できる。

労働市場、特に所得分配の問題に目を向けると、上の例で、比較優位産業を熟練労働集約的産業、比較劣位産業を非熟練労働集約的産業と読み替えると、熟練労働者の賃金の上昇と非熟練労働者の賃金の低下により、熟練と非熟練間で格差が拡大することになる（ストルパー＝サミュエルソン定理）。直接投資拡大の場合も同様な影響が指摘されている。

しかし、貿易自由化などのグローバル化はこのような所得分配に関する非中立的影響という、望ましくない側面を持つ一方で、望ましい面も当然持っている。マクロ的には世界経済および国内経済の資源配分は効率化され、ミクロ的には競争促進を受けて企業の生産性は上昇する。戦後日本の経済発展も、GATT自由貿易体制なしではとうてい不可能だっただろう。したがって、グローバル化の影響の一面だけを取り出して、ことさらその影響のみを強調することはバランスを欠く。この点では、米国を代表する経済学者であるAcemogluやAutorらが、中国からの輸入増加によって米国の雇用が200万人も奪われたとする論

文を発表しているが、読み手はその影響がグローバル化の影響の一部であることを十分に認識する必要があるだろう。

ところで、近年グローバル化は大きく変貌していると言われる。国際経済学者であるリチャード・ボールドウインの近著（『世界経済 大いなる収斂』日本経済新聞出版社）によると、1990年代からのグローバル化はICT技術の発達によってアイデアの移動のコストが低下したという点で、モノの輸送コストの低下が引き起こしたそれまでのグローバル化と性格を大きく異にしているという。遠隔地への情報の伝達が容易になった結果、先進国企業のノウハウが新興国の低賃金と結合し、オフショアリング、グローバル・バリューチェーン、タスクの貿易などが急拡大している。その結果、従来の産業ごとの比較優位という概念は曖昧になり、グローバル化の影響を受ける労働者は産業ごとではなく、細分化された特定の工程や仕事に従事する人というようにマイクロ化、複雑化しているようである。

近年のグローバル化の特徴をもう一つ挙げると、労働者の移動にまつわる問題が指摘できる。イギリスのEU離脱やトランプ大統領誕生の背景には移民の問題があった。貿易論では輸入される財に労働者などの生産要素が体化されると考えることがあるが、現実には、財の輸入と移民の流入では社会的影響は大きく異なる。今後人口減少の深刻化が見込まれる日本にとって外国人労働者受入は既に現実的な課題となっている。

以上見てきたように、グローバル化の影響は様々な顔を持ち、また近年一層複雑化している。感情的な賛成、反対ではなく、多面的な影響を冷静に理解する姿勢が求められよう。

（さくらい・こうじろう 専修大学教授）